

高岡市とその周辺地区の

肝障害患者に関する調査 (その2)

農協高岡病院第一内科 北 川 鉄 人

はじめに

高岡市とその周辺地区の肝障害患者に関する調査を、今年度の集計を加えて再び行なったが、調査に際しての問題点について述べる。

問題の焦点が農村にあるため、農村と農村以外の患者と比較検討する必要が生じるのは当然であろう。しかし、富山県は農業を中心として発展した地域であり、一部の工業地帯を除いてほとんどが農業従事者が在住している。とくに、富山県奥西の高岡とその周辺地区の住民については都心住居者、工場労働者の7割以上が兼業農家あるいは、以前の農村出身者でしめられているのが実情である。この地域は都市、工場を含めての広い意味での農村地域としてよかろうが、とくに、我々が農家としたものについては、少なくとも農業が主計となっている家族である。農家出身者・住居者と非農家出身者・住居者を厳密に区別するには、さらに詳細な調査が必要であるが、ここではカルテやアンケート資料にもとずいて区別するにとどめた。

調査の目的及び方法

昭和45年 1月 1日より、昭和46年12月31日まで農協高岡病院第一内科を受診した外来および入院の患者で、肝障害と診断された者を対象とした。調査資料は過去 2年間の入院および外来病誌より調査を行ない、さらに入院患者で肝障害と診断されて入院したほとんどすべてにアンケートを郵送し調査を行なった。

調査成績

1. 患者総数に対する肝疾患患者の割合 (入院)

	入院患者総数	肝障害患者 (初診)	入院患者総数 に対する割合
昭和45年	611人	81人	12.6%
昭和46年	1,085人	90人	8.3%

昭和45年の肝障害入院患者は 総計110人で(男78、女32)このうち29人は昭和45年以前からの継続患者であり、一部にカルテもれが含まれている。昭和46年度の肝障害患者総数は 108人(男67、女41)このうち昭和45年以前より継続した患者18人である。従って、昭和45年初診入院患者は81人、昭和46年では90人となり、入院が必要であると考えられるほどの肝障害患者数は昭和45年と昭和46年とを比較して大差がみられないことがわかる。男女別では昭和45年度と同様、男の患者が女の患者の約 2倍である。入院患者総数に対する肝疾患患者の割合が、S46年度ではむしろS45年度に比して減少しているが、この理由は肝障害患者が減ったのではなく、病棟の実務(回転率)がより効率化したため、一般患者の入院数が増加したためである。

2. 外来受診患者総数に対する

外来肝疾患患者の割合

	外来患者総数	肝障害患者 (初診)	総数に対する 割合
昭和45年	3,929人	112人	2.8%
昭和46年	3,962人	118人	2.97%

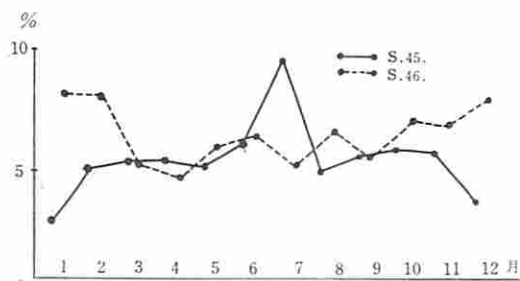
昭和46年度で外来の肝障害患者は228人で、このうち入院患者は108人である。228人のうち、昭和46年以前より継続している患者は44人である。従って、入院患者をのぞいて外来通院だけの肝障害患者を昭和45年、46年と比較すると112人及び118人となり、その受診率に明らかな増加を認めない。外来患者の場合でも女は男の半分以下の数であった。ここで、外来の肝障害患者の意味を考えなおすと、入院するほどに至らなかった軽症患者が主体となっていることに注目したい。

3. 肝患者初診

年 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
S 45	10	12	17	13	17	20	36	16	18	16	14	9	193人
S 46	22	20	17	16	12	23	25	22	14	17	18	16	228人

一般患者初診

年 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
S 45	316	237	318	350	332	338	398	355	335	287	261	258人
S 46	276	254	329	349	312	375	507	349	264	254	279	215人



図表1 一般患者に対する肝患者の月別受診状況

肝疾患患者の月別受診状況とは前年度よりの肝疾患患者を含め、当年の該当する月に初診した肝疾患患者総数を意味する。ただし、S45年度の場合、前年度よりの患者を含めて先回の集計表によったものである。肝疾患患者の月別受診状況はS45年度とS46年度とほとんど大差はみられない。図表1は月別患者総数（初診）に対する肝障害患者の割合は1月から12月まで比較したものであり、その月別にみた一般患者の肝患者受診者の割合に大きな変化がみられないことがわかる。S45年度の6月に一つのピークがみられるのは、このとき肝炎が流行したことを意味するであろう。

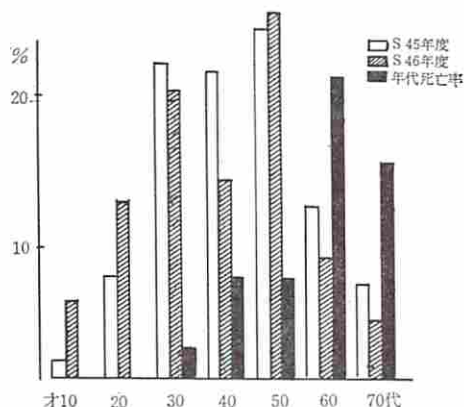
4. 肝障害患者の地域分布状況

前年度の集計では、外来および入院患者に分けて地域別に県の地図上に表示した。その結果、外来および入院の分布状況に大差はみられなかったため、患者の地域別分布状況の図は今回は省略した。46年度では、肝疾患患者 184人のうち高岡市住在の者は107人と 57.5%である。多い順に列記すると伏木9、中田5、戸出4、美幸3、能町3、横田3、清水3人……などで、高岡市内でも69カ所に一様に発生している。肝患者の受診の最も多い

高岡市内で、患者発生状況の地区的分布には特徴的なものはつかめなかった。

5. 肝障害患者の年代別調査

年 \ 代	10才	20才	30才	40才	50才	60才	70才	
S 45 年	3	18	51	50	57	30	16	228人
S 46 年	11	25	37	28	49	17	8	184人
死亡 者	入院	—	—	6	5	9	2	22人
	外来	—	—	2	—	3	1	7人



図表2 肝障害患者の年代別調査

年代別で肝障害患者の最も多いのは50才代であり次は40才代、以下30才代、20才代となっている。10才代の若年者や60、70の老年者では肝障害患者の外来での受診率が低いことがうかがわれよう。この年代別肝障害患者の発生状況と肝障害で死亡した患者を年代別に比較すると興味ある問題がうかがわれる。受診率と罹患率とがほぼ併行するものと考え、40才代と60才代に死亡のピークが

あるのではないかということである。外来患者の死亡というのは他の肝疾患以外の合併症や事故死も考えに入れてよかろう。外来の患者も含めて図示すると、図表2 のようになり、高年代になると

肝障害が少ない印象があるが、こたは高年代では病院外来を訪れる機会が少ないということも考慮に入れなければならないであろう。

6. 2年間の肝障害患者の死亡者

性 名	性	年齢	農 家	病 名	死 因	剖 検 所 見
1. M・S	♂	66才	農	肝 癌	消化管出血	
2. T・K	♀	61才	農	肝 硬 変 肝 癌 の 疑 い	肝 性 昏 睡	
3. Y・M	♀	61才	農	肝 癌 の 疑 い	肝 性 昏 睡	
4. O・T	♀	52才	非 農	肝 癌 の 疑 い	肝 性 昏 睡	
5. O・M	♀	51才	非 農	肝 癌 の 疑 い	肝 性 昏 睡	
6. H・M	♂	54才	農	肝 硬 変 肝 癌 の 疑 い	腹 腔 内 出 血	乙型肝炎変・肝 癌
7. Y・H	♂	40才	技師	肝 硬 変 肝 癌 の 疑 い	肝 性 昏 睡	乙型肝炎変・肝 癌
8. H・M	♂	54才	電 工	肝 硬 変 肝 癌 の 疑 い	消化管出血	
9. K・K	♀	63才	農	亜急性肝炎の 疑い	肝 性 昏 睡	(慢性肝炎)
10. M・S	♂	68才	農	慢性肝炎再燃	肝 性 昏 睡	亜急性肝炎
11. K・T	♀	60才	農	亜急性肝炎	肝 性 昏 睡	亜急性肝炎
12. M・G	♂	75才	非 農	亜急性肝炎	消化管出血	(亜急性肝炎)
13. O・H	♀	48才	農	亜急性肝炎	肝 性 昏 睡	(亜急性肝炎)
14. T・S	♂	53才	製 薬	激 症 肝 炎	肝 性 昏 睡	(広範壊死)
15. O・S	♂	44才	非 農	激 症 肝 炎	肝 性 昏 睡	(広範壊死)
16. U・S	♂	69才	呉 服	肝 硬 変 糖 尿 病 性	肝 性 昏 睡	甲型肝炎変
17. U・R	♂	43才	飲 食	アルコ-ル性 門脈性肝硬変	肝 性 昏 睡	門脈性肝硬変 (M体多発)
18. M・T	♂	43才	菓子製造	ヘモクロ- マト-ー- マ-ト-ー- ジ-ス	肝 性 昏 睡	乙型肝炎変・ヘモ クロマト-ー- ジ-ス
19. O・T	♂	41才	農	中毒性皮膚炎 薬物性肝障害	全 身 衰 弱	(慢性肝炎)
20. A・Y	♀	63才	無	肝 結 核	全 身 衰 弱	肝, その他の臓器 の結核症

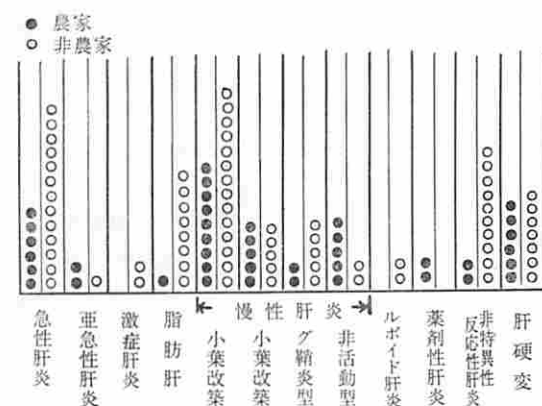
() 内は死後生検

S45年、S46年の2年間の入院患者189人のうち肝臓病のみで死亡した患者で、主病変が肝臓にあって、その疾病の増悪により死亡した患者は総計20名であった。このうち、肝癌は8人、亜急性肝炎の症状を呈した者は5人、激症肝炎は2人である。肝疾患の死亡者の病名で最も多いのは肝癌であり、つぎに亜急性肝炎、激症肝炎であることがわかる。とくに肝炎で急激な経過をとって死亡にいたる激症肝炎や亜急性肝炎は農家の人に多いということもうかがわれよう。当科での患者の肝臓病死因のすべてが肝性昏睡をおこし、消化管の出

血を伴うものであった。第一内科で肝臓病死亡者20人のうち剖検を行なった者は8人であり、剖検が得られないために死後生検をなし得た者は6人である。特異な症例として、別に報告があるのでここでは病名を列記することにとどめたい。症例17はアルコール性の門脈性肝硬変であり、マロリー体の多発が見られた症例である。症例18はBanti症候群で副脾後10年の経過を経て輸血によりヘモクロマト-ー-ジ-スとなったが剖検にて一次性ヘモクロマト-ー-ジ-スの所見が得られた症例である。症例19は兼業農家で薬品会社に務めトリクレ-ンの薬

物アレルギーと中毒性皮膚炎と急性肝障害を引き起し、さらに皮膚炎の反復・増悪のため肝障害が進行し全身衰弱となって死亡した症例である。症例20は、長期間の入院にもかかわらず、最後まで診断不明のままで剖検後に肝結核と診断された興味ある症例である。

7. 肝生検の組織学的分類（農・非別）



図表 3 農・非別にみた肝生検の組織分類

一部の剖検患者や生検組織診断不明のもの、肝痛などは除外した。生検患者は農家40人、非農家69人の計109人である。临床上、急性肝炎の症状を呈しているも肝生検や腹腔鏡で慢性肝炎や、ときには肝硬変の再燃型として認められるのが多いのは周知のことである。生検診断で慢性肝炎の多いのは、慢性肝炎の治療上の意義のために、すなわち診断を正確にし、予後を見通そうとしたために生検例数が増えたものと思われる。肝生検組織診断で農家・非農家を比較検討してみると、とくに目立つ点としては、脂肪肝が農家よりも非農家に多いことや、慢性肝炎非活動型が農家に多いことなどがうかがわれる。非特異性反応性肝炎は農家よりも非農家にはるかに多いのは後で述べるように以外な結果である。

8. 「いわゆる肝障害患者」について（主として2年間の外来）「いわゆる肝障害」とは臨床的に肝炎や肝障害を起こすような誘因もなく、また不定愁訴があって病院を訪れたが肝機能では、GOT・GPT、A β -Pの一過性の軽度の上昇をみとめられるにすぎないというような症例である。肝腫は軽度のみとめられることが多い。ただし、胆

のう症はみられないものである。

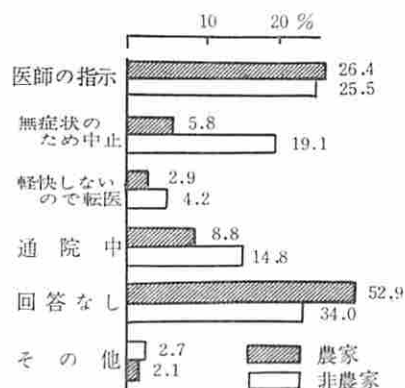
	農家	非農家	計
男	28	37	65
女	16	23	39
計	44	60	104

このような症例は2年間の肝障害患者230人のうち104人(45.2%)である。「いわゆる肝障害」は腹腔鏡では白色肝などがみられ、慢性肝炎非活動型、非特異性反応性肝炎の生検組織像がみられた。このような肝障害は環境因子や食餌性因子、アルコールの多飲、労働過剰、睡眠時間の不足、農薬の使用などによって起こり、農家に多いものと予想していたが、非農家にやや多いような結果が得られた。しかし、女性よりも男性はるかに多いのは、上記の諸因子が何らかしだ肝障害因子として関与しているのではないだろうか。外来患者で農家・非農家を厳密に区別すること事体が困難なことであり、上記の表を農家・非農家の区別によって評価するには問題があると思われる。

9. アンケート調査

アンケートはS45.1.1からS46.12.31までの入院患者の生存者に150部郵送し81部が回収された。このアンケートより次のような調査が得られた。

A. 治療中止の理由

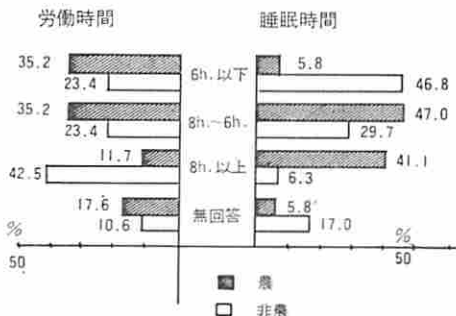


図表 4 治療中止の理由

アンケート回答者のうちでは治療中止の理由として医師の指示によるものが多く、転医した者が少ないことがわかる。ただ、無回答者は農家より非

農家の方が少ないのは外来通院患者でよくうかがわれるように、医療態度の積極性如何によるものであらうと思われる。

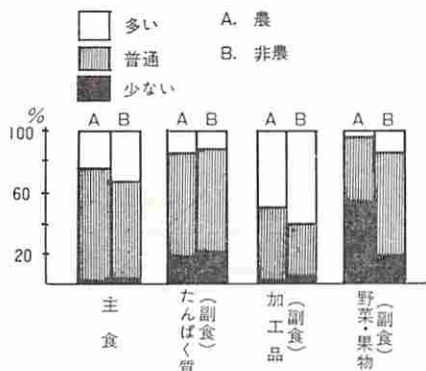
B. 労働時間と睡眠



図表 5 労働時間と睡眠時間

表5 は肝疾患の発病前の調査でなく主として入院治療後の患者のアンケート調査の結果であることを銘記したい。この図表では、農家よりむしろ非農家側に睡眠時間の不足・労働過剰があるようにみうけられ、農家よりむしろ非農家側に慢性肝炎が多い原因のひとつとなっているのではなからうか。

C. 食生活状況



図表 6 食生活状況

食事指導がゆきとどいているためか、主食やたんぱく質には農・非ともに問題がない。野菜、果物の摂取は非農家側ははるかに少ないことがうかがわれる。アルコールの摂取については、この地方ではかなり大量摂取者が多く、アルコール性肝炎²⁾³⁾⁶⁾についての特殊例を報告したことがあるが、今回のアンケート調査では肝炎治療者であるためほ

とんどが飲用していない結果がでていたので省略した。

まとめ

1. S45年、S46年 2年間の肝疾患患者の発生状況を一般患者の受診率より推定すると、入院を要するものも(重い患者)、外来で治療できたもの(軽い患者)も、それぞれにS46年の方が増加したという結果は得られなかった。

2. 昨年度にひきつづき、地域別分布(患者発生状況)をみても、特異なものはみられなかった。

3. 月別受診状況より患者発生を推定したがそのグラフは平坦であり、肝疾患発生状況には季節的な影響がないように思われる。

4. 肝臓病患者は50才代に最も多く、高年齢の増加とともにむしろ発生率は減少するの、死亡率が増加して行くような傾向がうかがわれ、老年者の肝障害の予後はわるいことがうかがわれよう。

肝臓病での死亡者の内では肝癌が最も多く、ついで急性肝炎の激症型が多い。

5. 慢性肝炎や非特異性反応性肝炎は非農家に多く、その原因として野菜食の不足や退院後の労働過剰も考えられた。

6. 症状のない肝腫大など、「軽症のいわゆる肝障害型」はむしろ非農家に多い傾向がうかがわれた。

7. 今後の問題点

最近問題となっている肝炎ウイルス(Au抗原)と肝障害や肝癌の発生、疾病の経過などについても臨床的に追跡しなければならないと思う。また今回までと同様の調査を明年以後も継続して見て行きたいと思う。さらに、農村に多いアルコール肝障害の問題や、²⁾³⁾⁶⁾今までに報告した2~3の症例のような稀有な症例についての臨床病理学的検討も興味ある課題であらうかと思われる。ただ、私共はひとつの病院の一診療科にすぎないので当外来だけに必ずしも肝疾患が集中して来院してはいるとはいいい切れぬような現状である。現在の問題として肝疾患があればなるべく当科へと紹介していただくようにしていただければ私共の上記の目的が少しでも達成できるのではないかと思う。

(本稿の集計その他に協力していただいた看護婦の津野よし子、看護学生の朝倉洋子、北野民子、

水本百合子氏に謝意を表す)。

文 献

1. 北川：高岡市とその周辺地区の肝障害患者に関する調査(その1)。
富山県農村医学研究会誌 2：46、1971.
2. 北川、太田：Mallory体の多発した門脈性肝硬変の1剖検例、肝臓 13(1)：44、1972.
3. 北川、太田：
Banti 症候群で剔脾後10年の経過中に進展したヘモクロマトーシスの1剖検例(第8回、日本肝臓学会発表)。
4. 北川、池上、高田：
紅皮症に伴った肝炎の1例
日内誌、60(5)：457、1970.
5. 北川；急性アルコール性肝害症例の臨床病理学的検討、日内誌、60(11)：1229、1970.
6. 北川：一過性に Mallory体の出現がみられたアルコール性肝炎の1例
(第74回、北陸内科地方会に発表)。